

ガンを宣告され「命の授業」

◇「心の中で生きている」――受け止めた子供たち

「やせ衰えていく自分の姿で、命の重みを伝えたい」。末期がんで余命わずかと宣告されながら、子供たちに命の尊さを伝えようと、最後まで教壇に立ち続けた神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校の大瀬敏昭校長。昨年12月24日の終業式まで登校したが、翌日から入院し、今月3日、57歳で帰らぬ人となった。痛みと苦しみに耐え、毎日12時間点滴をしながら、子供たちに残したものは何だったのか。【川久保美紀】

◇心の宝物◇

「命ってなんだろう」。昨年5月28日、3年3組の教室。大瀬校長は、がんで長くは生きられないことを子供たちに告げ、問いかけた。「みんなが学校で飼っているヤギが赤ちゃんを産んだね。ヤギはいつか死んでしまうけど、お母さんの命は赤ちゃんに……」

子供たちが言葉をつなぐように「リレーされてる」「つながっている」と答える。大瀬校長は笑顔で応えると、ゆっくりと絵本「わすれられないおくりもの」を読み聞かせた。死んだアナグマが、みんなの心に宝物となるような知恵や思い出を残し、仲間たちはアナグマが心の中で生き続けていることに気付く。

＜アナグマは、死ぬことをおそれてはいません。死んで、からだがなくなっても、心は残ることを、知っていたからです＞。大瀬校長はそして「命には限りがある。でも、つながっています。心としての命は永遠に残るんだよ」と語りかけた。

◇ 絵本との出会い◇

大瀬校長は99年11月、進行性胃がんと診断され、胃を全摘出した。退院後、自分の体を“教材”に「命の授業」をするようになったが、02年1月に再発。「余命3カ月」と宣告された。命の終えんをどうやって子供たちに見せるか。「やせ衰えていく自分の姿を見せることで命の重みを伝えたい」。これが出した答えだった。

死を突きつけられた大瀬校長に生きる勇気を与えたのは「絵本との出会いだった」という。「わすれられないおくりもの」「100万回生きたねこ」「葉っぱのフレディ」……。大瀬校長はこれらの絵本を授業に使った。命の授業は99年以降、3年生から6年生らを対象に18回に及んだ。

「伝えたいことは三つあります」。昨年8月、夏休み中の校長室で、命の授業に込めた思いを記者に語ってくれた。

「一つは、命には限りがあるということ。命は延ばすことはできない。でも、自分で縮めることができる。だから、命を縮めてはいけないというのが二つ目です。縮めるとは、自殺や自分の尊厳を辱めること、つまり自分を粗末にすることです。三つ目に信じるものを持つこと。神でも家族でも友達でもいい。何かよりどころとなるものを持って

ほしい」

授業の中で、これらの思いを直接語ることにはしない。だが、子供たちはメッセージを受け止めていた。授業の感想文にはこうつぶられていた。

「えいえんの命っていうのは、みんながこうちょうせんせいのことがすきだからえいえんのいのちだとぼくはおもいます」

「ぼくは、えいえんってとこに気がついたことがいのちだとおもいます」

「死んだんだから、もうこの世にいないと言いはる人がいますが、わたしはそうはおもいません。死んでしまっても人の心の中で生きていると思います」

受け止めた子どもたち「心の中で生きている」

◇最後の授業◇

昨年10月29日、大瀬校長は3年生のクラスで、写真を使ってアートの授業をした。「自分の宝物を撮ろう」。子供たちにレンズ付きフィルムを配り、宝物の写真でコラージュを作る。

大瀬校長は自分の宝物として万年筆やカメラと一緒に、遺影用の写真を見せた。12月19日には作品発表会を開き、家族、友達、ペットなどの写真がちりばめられた子供たちのコラージュを「いいねえ」とうれしそうに眺めていたという。これが、最後の授業になった。

このクラスを担当する三浦智代教諭（30）は、授業のテーマを「自分探しでは」と言う。「大瀬校長が授業で何を伝えようとしたのか。その答えを見つけることが、教師の私に与えられた課題だと思っています」

◇千の風になって◇

「校長先生が読んでくれた絵本、授業でお話ししてくれたことは、ずっとみなさんの心に残った忘れられない贈り物です」。今月8日の始業式。奥谷英敏教頭（52）の言葉に子供たちは目を閉じ、静かに祈った。「校長先生、今までありがとう」。校長室には授業で使った遺影が置かれ、その前には、子供たちからの手紙が並んでいた。

痛みに耐え、死の恐怖と闘い、それでも「学校に来るとすべて忘れ、元気になる。子供たちがエネルギーをくれる。最後の最後まで仕事をしたい」と語った校長。昨年度まで研修主任として命の授業に携わった栗原幸正教諭（46）は振り返る。「余命を宣告されてから最後の2年間は、『校長』ではなく『教師』に戻っていった。大瀬校長がたどり着いた一番大切な原点が教壇に立つこと、つまり『教師』だったんだと思います」

大瀬校長は今月9日に6年生のクラスで予定していた命の授業を楽しみにしていたという。授業では、1冊の本を使うつもりだった。作者不明のある英語詩を翻訳した

「千の風になって」。昨年12月24日、於保和子教諭（44）が終業式前に手渡した。

終業式の後、校長室で点滴をしながら本を読み「9日の授業でこの詩を使う」と於保教諭に話したという。その詩には、こんな一節がある。

＜私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかいません＞

千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています＞

自分の姿を重ねたのだろうか。いつか授業で言った言葉をもう一度、子供たちに伝えなかったのかもしれない。

「心って永遠の命だね」